

巻 頭 の 辞

本年は明治維新 150 周年ということで、それを祝う行事が各地で開催され、関連した書物もたくさん出版されている。明治維新の評価は、立場によって、地域によって様々であり、倒幕側の正義を強調したいいわゆる薩長史観なるものを批判的に見直す動きも目につく。新史料の発掘や既存史料の再解釈を通じて、頑迷な幕府と開明的な薩長といったステレオタイプの見方に対して、新たな知見が提供され、我々の歴史認識が修正を余儀なくされる場合もある。過去をみつめなすことは、現代を、そして未来を偏りなく展望する上で重要である。歴史を知ること、古典を読むことの意義はいつの時代でも失われない。経済研究所の活動の重要な役割の一つは、過去の知を蓄積し、それを現代に生かすことである。

2017 年度に経済研究所は創設 30 周年を迎え、それを記念してシンポジウムや講演会を催すとともに、10 年ぶりに貴重書展示会—高垣寅次郎とその世界—を開催した。もともと当研究所は日本の貨幣論・金融論の泰斗である高垣寅次郎先生の蔵書を中心とする高垣文庫を母体として発足しており、所蔵している貴重書の整理・保存は研究所に課せられた大きな使命である。それと同時にその貴重書を教育や研究に活用し、広く社会の学術的要請に応えるという大事な役割を担っている。しかしながら、保存と活用は相反する性格も有しており、一般向けに公開するには周到な準備が必要で、なかなかその機会をもつことができなかったが、今般当研究所スタッフの献身的な努力と大学図書館の協力を得て、11 月上旬の学園祭の期間を中心に開催することできた。蓄積した知の社会への発信という役目を幾分かでも果たせたことは喜びに堪えないところである。

展示会場は経済研究所と図書館の 2 ヶ所に設けられた。経済研究所会場では高垣先生の主要な著者や手書きの原稿等が展示され、昭和 38 年に行われた昭和天皇への御進講の肉声も流され、来場者の関心を大いに引いた。また先生の蒐集された貴重書の中からイギリス 19 世紀前半の地金論争に関わる文献が数多く展示された。この論争は多くの著名な経済学者を巻き込んだ金融政策や金

融制度に関わるもので、昨今のわが国の金融問題をめぐる議論にも興味深い示唆を与えるものであることを示唆する詳細な解説も掲示された。図書館会場では、学生にも馴染みのある、アダム・スミスの『国富論』など経済学の古典の貴重な初版本を展示した。先人の生い立ちや偉業を解説した映像資料も提示され、学生や研究者の学問研究への意欲を掻き立てる一助となりうる、意義深いものであったと自負している。幸いにしてたくさんの方々にご来場いただき、成功裡に終えることができた。来場者はもとより、準備・運営に当たられた関係者にもこの場を借りて感謝の意を表したい。

さて、昨年度は上記の展示会以外にも、成城学園創立 100 周年、経済研究所創設 30 周年を記念して、活発な活動を展開した。7 月には座長に元日本銀行副総裁の岩田一政氏をお迎えし、「2050 年の世界に向けて日本は何をすべきか」をテーマに記念シンポジウムを開催した。パネリストの岡田豊（みずほ総合研究所主任研究員）、山本謙三（NTT データ経営研究所取締役会長）、岩本康志（東京大学大学院経済学研究科教授）の諸先生には各自の専門の観点から今後の日本の課題や進むべき進路について興味深い分析をしていただいた。200 名を超える参加者が熱心に報告を傾聴され、シンポジウムの後半ではフロアからの質問も交えて、有意義な議論が行われた。10 月には「文明と経済—古代・中世の社会経済構造」というテーマの下、大月康弘先生（一橋大学大学院経済学研究科教授）と本学経済学部教授の明石茂生先生に、古代メソポタミアから中世ヨーロッパにかけての貨幣、信用、国家の様相や再分配構造についてご講演をいただき、その後両先生による対談が行われた。古代・中世のヨーロッパの社会経済構造の特質について興味深いお話を伺うことができた。

本年度は、研究所として新たな第一歩を踏み出す年であると位置づけられる。当研究所のバックボーンである高垣文庫の整理・保存事業を進め、より利用者の利便に供する体制をつくるとともに、経済・金融・経営に関するプロジェクト研究を深化させ、その成果の社会への発信を一層強化していきたい。学内外の関係者の一層のご支援をお願いする次第である。

2018 年 4 月

成城大学経済研究所長

手塚 公 登